

# 近代日本の家族におけるしつけの変遷

## — 1930年代から40年代生まれの女性の検証 —

新保 敦子

### はじめに

#### (1) 課題設定

本論文は、近代日本の家庭におけるしつけの変遷を明らかにするための基礎作業として、1930年代～1940年代生まれの女性が家庭で受けたしつけに関して検討することを目的としている<sup>1</sup>。

昭和期以降、戦争、戦後の混乱期、高度経済成長とその終焉など、日本社会は激動の時代を経てきた。そして、家族のあり方についても、戦後の団塊の世代の登場、核家族化の進行、専業主婦層の広がりなどに見られるように、戦前の「家」を基盤とした「伝統家族」から、「近代家族」へと大きな変化を遂げてきたことは、周知の事実である。

ところで、人口学の伊藤達也は、日本において「多産多死」から「少産少死」へと人口転換するプロセスについて、「多産少死」となる移行期は、1925年～1950年の間に生まれた世代で区切ることが提唱している<sup>2</sup>。家族社会学を専門とする落合恵美子は、この移行期世代（昭和一桁から団塊の世代まで）が家族の「戦後体制」を作ってきたと指摘する<sup>3</sup>。家族の戦後体制の特徴は、出産平等主義、専業主婦の大衆化であり、男女性別役割分業、親子の愛情による家族の結合といった「近代家族」の中心的な主役となったのが、移行期世代であった。また、移行期世代は「教育する家族」の主要なアクターであり、「教育戦略」の担い手である。

本論文は、移行期世代のうち、1930～40年代生まれの女性に焦点を当て、社会変動の中で、彼女たちが、家庭において主にどういったしつけを受けているのかをまず明らかにする。この世代は、明治生まれの父母から家父長制の色濃い教育を受けた世代でもある。また戦争に伴う家族の置かれた環境の急激な変化（戦災、家族の欠損、食糧難）にも直面していた。付言すれば、移行期世代の母となる明治生まれの女性は、4人以上の子どもを産んでいるのが多数派であるため、移行期世代は兄弟・姉妹の数が多し。

さらに本論文では、移行期世代の受けたしつけが、次世代以降へのしつけにいかにつながっていくのかを試行的に検討するため、2020年に東京都A区で実施した家庭教育調査（以下、A区調査

(2020))を参照しながら考察する。

先行研究から見ると、家族や家庭教育に関する研究は多くの蓄積がなされてきたが<sup>4</sup>、本稿の執筆において、特に参照した研究としては、広田照幸の『日本の家庭教育は衰退したか』がある<sup>5</sup>。同書では、青少年による凶悪事件が補導される中で、ややもすれば家庭の教育力の低下を問題視する傾向があるが、旧来のしつけ観を残す山村の方が放任ないし学校教育依存の傾向が強いことを指摘する。そして、近年の少子化の浸透、マスメディアを通じた情報過多が「教育する家族」を社会各層に浸透させたことを論じている。

また、江戸時代以降の庶民の家庭におけるしつけについて論じた著作として、有地亨『日本人のしつけ』がある<sup>6</sup>。同書は、明治期以降の家庭における家庭教育の諸相を、著名な人物の家庭における回想録から検討している。世代クラスターによるしつけの継承という点から、しつけについて論じている点も興味深い。

さらに1990年代以降、親による教育関与に関しては、本田、苅谷など、社会階層や教育格差との関連研究の深まりがあった<sup>7</sup>。このように多くの研究が家庭教育を巡ってなされてきた。

一方、天童睦子は教育言説の中で、「家庭教育」には、子どもの社会化としての家庭教育、とりわけ規範や道徳面での家庭での教育を意味する「しつけとしての家庭教育」と、学校教育の学習面での補完を意図した家庭での学習や子どもの地位達成を目的とした親の意識的働きかけを意味する「戦略としての家庭教育」という二つの含意があると指摘する<sup>8</sup>。これまで、家庭教育といった場合、「戦略としての家庭教育」が論じられてきており、規範や道徳面での家庭での教育を意味する「しつけとしての家庭教育」については、必ずしも十分な検討が行われてこなかった。そのため本稿では、「しつけとしての家庭教育」に重点を置きながら論じる。

本論文においては、移行期世代の出身家庭における家庭教育を検証することで、戦前の「家」を基盤とした「伝統家族」から「近代家族」への過渡期の諸相を明らかにしていきたい。とりわけ、家庭における子どもの社会化に不可欠な規範的文化に焦点をあてて、その世代間継承についても視野に入れて論じていくものとし、そこに一定の意義があると考ええる。

## (2) 研究方法及び調査概要

研究方法としては、主に量的及び質的なアプローチを用いている。まず、質問票を郵送し、回収されたサンプル(計236人)から、1930年代～40年代生まれの女性の質問票を抽出し検討した(34人)。質問票の自由記述部分も参考にした。

また、こうした質問票による調査に加えて、追加調査という形でインタビューを実施した(電話や手紙を含む)。追加調査を行ったのは、8人である(Tさん:1934年生まれ、Hさん:1935年生まれ、Kさん:1936年生まれ、Iさん:1938年生まれ、Cさん:1941年生まれ、Yさん:1942年生まれ、Sさん:1943年生まれ、Mさん:1944年生まれ)。人口移行期世代について、年齢的に1920年代生まれは調査が難しく、本調査での調査対象に含まれる1930年代生まれは、調査が可能

な最高齢と言えるのかもしれない。また、インタビュー対象者であるが、出身家庭は、都市近郊が多いことを、最初に断っておきたい。

親子関係は計量的なアプローチでは測定が困難な部分が多いため、インタビューといった質的なアプローチは有効であり、事例を比較しながら検証することが可能となる。

調査は、2020年4月～2021年12月の1年半以上にわたって実施された（インタビューはTさん（2021年7月30日）、Hさん（2020年10月1日）、Kさん（2020年4月15日）、Iさん（2021年11月19日）、Cさん（2021年9月29日）、Yさん（2020年8月5日）、Sさん（2021年12月20日）、Mさん（2021年8月21日）、以上である）。世界的なコロナウイルスの感染拡大に伴い、日本でも幾度かの緊急事態宣言が出されたために対面での調査が難しく、複数回の調査を含めて調査期間が約1年間に及ぶことになった。

また、本研究は、A区調査（2020）を参照しながら検討する<sup>9</sup>。同調査は、東京都A区S小学校の協力を得て、1～2年の児童を持つ保護者を対象に実施した質問紙調査である（東アジア子どもと教育研究会、194サンプル、回収率83%、2020年2月実施、学級への留め置き法）。保護者自身が子どもの時に受けた家庭教育と、現在、子どもに対して行っている家庭教育について、質問をした。回答者の年齢層は、35～44歳が中心である。同小学校は、再開発地域に位置して高層マンションが立ち並び、周囲には商店街、公園もあり、子育て世代には人気のあるエリアである。

## 1. しつけに関する家庭教育調査—調査結果

### (1) 主なしつけの担当者

ここでは、34サンプルの質問票の分析を行う。サンプル数は必ずしも多くはないが、傾向をつかむことは可能と考える。

しつけの主な担当者（複数選択可能）は、母親（29人）であるが、調査結果からは、母親とともに父親（14人）がしつけに関わっていた実態が浮かびあがってくる。たとえば、Kさんの家（都市、商家）では、父親が立ち居振る舞いや身のこなしに非常に厳しかったという。父が家におり、父親の権威があったため、しつけにも介入していたということであろう。

あるいは祖父母と同居の世帯も少なからずあり、母親、父親と祖母がしつけに当たるとい

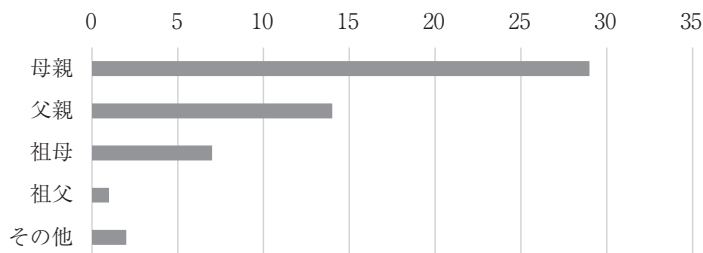


図1 主なしつけの担当者

少なくない。Iさんの家では、祖母が特に礼儀に関して厳しいしつけをしたという。祖母が同居の場合、母親が姑に対して何も言えないという場合もある。

このように、母親が主にしつけを担当しながら、父親、祖母もしつけに関与していた。ただし、インタビューの中では、「ほとんど放置で、親からはしつけをされた記憶が無い」(Yさん)、「道徳的なことは、学校で教えられた。近くのお寺に定期的に言っていて、その時のお坊さんの話が印象的。親から、何を教えられたという記憶は曖昧」(Sさん)といった意見もあった。

## (2) 日常のしつけの中で大切にされていたこと 幼い頃、小学校の頃、中学・高校の頃

日常のしつけの中で大切にされていたことは、幼い頃(幼児、学齢前時期)、小学校の頃、中学・高校の頃と分けると以下の通りである。

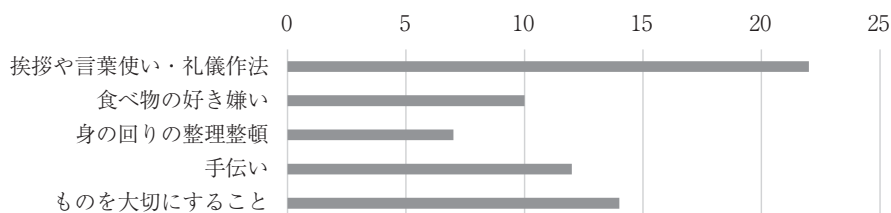


図2 日常のしつけの中で大切にされていたこと<幼い頃>

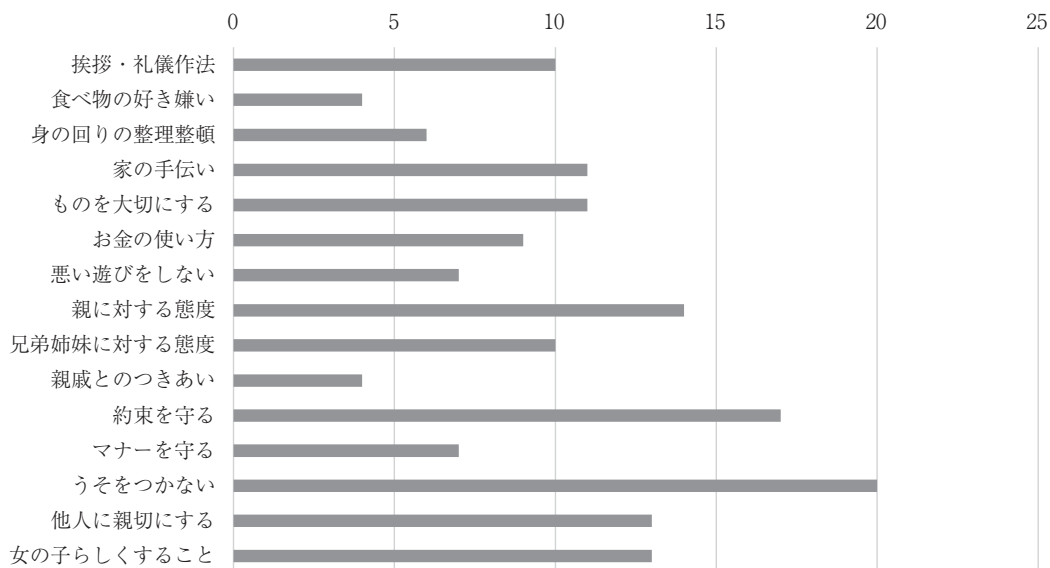


図3 日常のしつけの中で大切にされていたこと<小学校の頃>

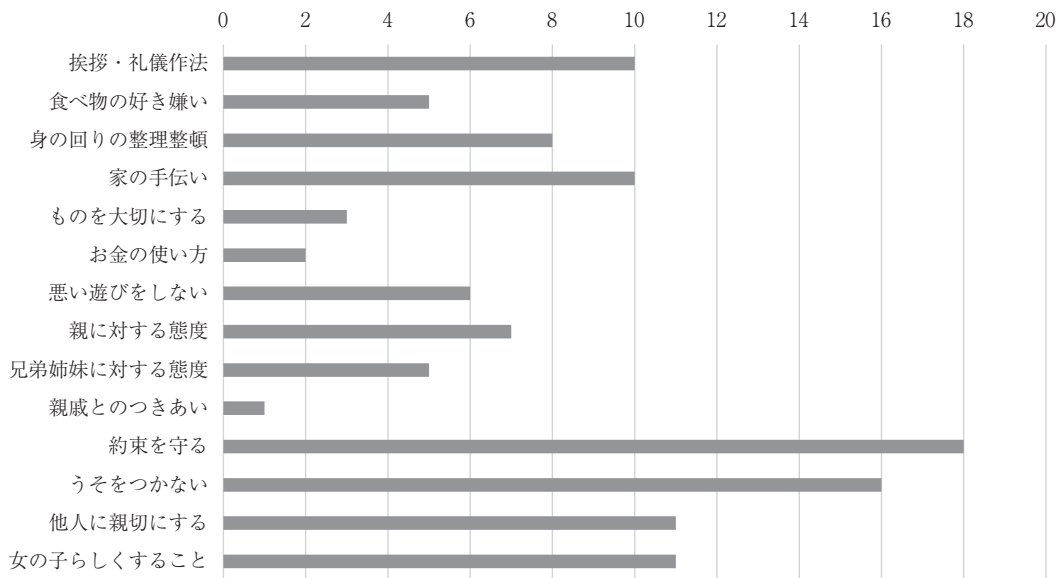


図4 日常のしつけの中で大切にされていたこと<中学・高校の頃>

① 挨拶，礼儀作法

幼い頃（幼児，学齢前時期）から，挨拶や言葉使い，礼儀作法といったふるまいが重視されていた。そのため幼い頃において「挨拶や言葉使い・礼儀作法」は，最も回答数が多い項目である。

たとえば，Kさんの場合，「昔の家庭はこんなものかと思うが，自分の家は厳格で嫌いだった。父親（武士の家庭の出身）はとにかく厳しく，子どもに対してうるさい父であった。明治の人間で，朝，起きたら神棚に向かって手を打って挨拶。それから，食事。その時に，正座をして，お膳の前を30センチあける，肘があがっていてだめだとか，おしゃべりをするとか，本当にうるさい父だった。ただ，そのため，その後，どんな場所に行っても大丈夫であった」という。父親が厳しくしつけをしていた事例であろう（家父長的秩序）。

また，中学，高校になると，すでに基本的マナーが習慣として習得されているため挨拶，礼儀作法の優先順位が下がっているものの，やはりしつけの中で重視されている。

② ものを大切にする

ものを大切にすることは，しつけの中で，親が重視していたことである。インタビューでも「ものを絶対に粗末にしないように」と言われたという（Yさん）。特に，食べ物は貴重で，食べ物を粗末にせず，好き嫌いを言わないことが，しつけとして重視されていた。当時は，食糧難であり，Iさんによれば，「一般の私たちは，餓死寸前。食べ物について，一生忘れられない。今でも捨てられない。食料事情が悪いので，子どもといえども好き嫌いがあっても黙っている」という状況であった。

## ③ 約束を守る、嘘をつかない

対人関係における規範意識として、小学校から中学から高校にかけては、「約束を守ること」が特に重要視されていることに注目したい。「嘘をつかない」ことも、親から言われたことの中で、最も数が多い項目の中の一つである。

このように、約束を守ること、嘘をつかないことが、家庭におけるしつけの重点項目であった。

## ④ 対人関係一人に迷惑をかけない、人に親切に

質問票の自由記述の中には、子ども時代から高校時代を通じて、家庭の中で特に重視されたこととして、「人に迷惑をかけない」が多かった。これは、インタビューにおいても、しばしば出てきた回答である。Iさんも、Mさんも人に迷惑をかけない、ということが言われたと述べている。父がしつけに厳しく、「人に迷惑をかけてはいけない。人に手をかけるのは絶対にいけない」と言われたという人もいた(Tさん)。

また、対人関係に関するしつけの項目として、「人に親切に」と言われたことも多くの調査対象者が指摘している。戦前から戦後にかけての貧しい時代の中で、「助け合わないと生きていけなかった」というのが実情であった。また、インタビューの中では、「畑で何かとれた時には、隣近所の玄関先に置いておく。助けあうのが普通であり、人に親切にというのは、ごく当たり前のことであったので、特に親から言われた記憶は無い」という話もあった(Iさん)。

## ⑤ 手伝い

幼い頃から、小学校時代、さらに中高校時代に、家の中で、家事の手伝い(家事労働)が重要視されていた。たとえば、Iさんは、家族のために食事の準備をしたという。「おばあさんと、かぼちゃを(塩が無いので)海水で煮ることが自分の仕事であった」と語る。家事(家事労働)としては料理、掃除、風呂焚き(五右衛門風呂に水を張って、薪で火をつける)などがある。なんらかの形で、子どもは小さい時から、家事労働を割り当てられ、担っていた。

家事労働の他に、農業労働(農作業)もある。たとえば、苗を運んで、植えたり、家畜の世話がいった(Yさん)。また、Sさんは、家が果樹栽培の農家であった。そのため出荷用の箱を作る作業をやっていた。ただ、これは、「手伝い」という範疇にくくられるものではなく、むしろ勤労であり、農作業であったとする。

家事労働にせよ農業労働にせよ、この世代は、なんらかの形で、労働に参加していた。農作業、あるいは食事を作ることは、行って当然のことであり、働かないと食べられないという事情があるように思われる。

## ⑥ ジェンダー規範 女の子らしく(立ち居振る舞い、親に従順である)

「女の子らしく」というのは、この世代への調査で、明確に出されている。日常の生活の中で、

女の子らしくと言われたという。スカートのたけが短いといって祖母（明治生まれ）から注意されたといった記述もある。

親に対する態度については、従順であることが求められた。親に従順でないと「女のくせになまいき」と叱られることもあった。また、「自分は、親（保護者）に従わなかったためにきつく叱られた」という回答（自由記述）もある。

### (3) 褒められたか叱られたか

#### ① 褒められたか、叱られたか

回答の中では、「どちらかという褒められる方が多い」が一番に多く（14人）、次が「褒められるのと叱られるのは同じくらい」である。褒めて育てるのをアピール型、叱って育てるのを強制型とするならば、アピール型が多いと言えよう。ただし、一方で、「どちらかという叱られる方が多い」「ほとんど叱られてばかり」も、一定の割合を占めている。褒めて育てる家庭が比較的に多いものの、叱ってしつける家庭も少なくない。各家庭によっても異なるということであろう。

#### ② 叱られたこと、褒められたこと

調査票の自由記述欄から見ると、叱られた事としては、まず第1に、兄弟姉妹げんかが多い。兄弟・姉妹順位によって、長女であったため「上ばかりがいつも悪いことにされて怒られていた」といった声もある。

叱られたこととして、第2には、「女の子らしく」は、多くの人が言われていた。特に、祖父母がしつけに関与する場合、服装であるとか（肌の露出をしないように）、派手な服装を着ないようにといったしつけがなされた（Iさん）。

叱られたときの方法であるが、叱られたときの方法は、一言注意するだけが多い。しかし、その一方で、親が大きな声でどなったり、たびたび口うるさくいたり、体罰を加えることもある。

褒められた事としては、手伝いが多い。ただし、手伝い（家での労働）で褒められたことがある一方で、家で働くのは当然のことなので、褒められない（Sさん）という意見もある。

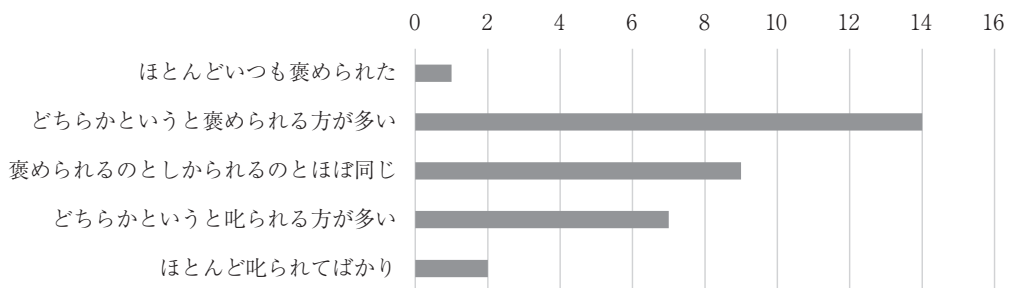


図5 褒められた場合とか叱られた場合とではどちらが多かったか

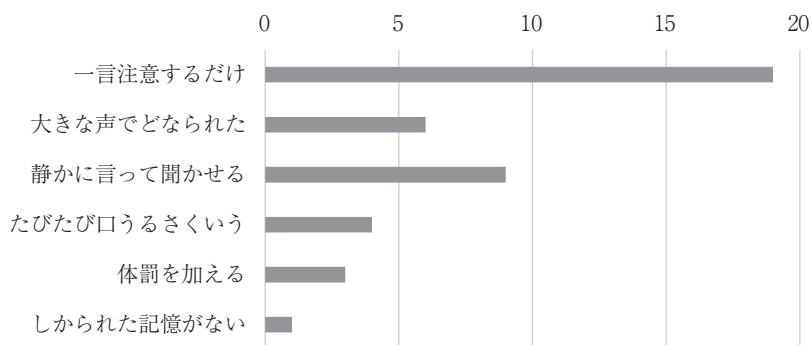


図6 叱られた時の方法



図7 しつけに関して家族の間での意見の違い

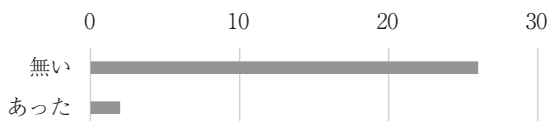


図8 しつけに関して教師と親との意見の違い

しつけに関して家族の間で意見の食い違いは、ほとんど無い。父親が介入する場合は、父親の意見に母親は従っている。また、祖母が介入する場合は、祖母の意見に母は従っている（インタビューの結果）。

しつけに関して、教師と親の意見は一致している。とりわけ戦前において教師は権威があり、学校で教えられる教育勅語の理念（「爾臣民、父母ニ孝ニ、兄弟ニ友ニ」）が国民の各家庭に浸透していたということでもあろう。

#### (4) 家庭でよくしていたこと—学業関連、年中行事

##### ① 学業に関連する内容

学業に関連しては、「本や新聞を読むように勧める」の回答者も少なくない。個別のインタビューによれば、学業に対して比較的熱心な家庭は、商家、寺、父がサラリーマンで妻が専業主婦などである（Hさん）。Kさんは、家庭が商家であったが、学業面に関しても熱心で、本や新聞を読むように勧める他、絵本の読み聞かせ、勉強を促すこともあった。また、「勉強しなさいと言われたこ



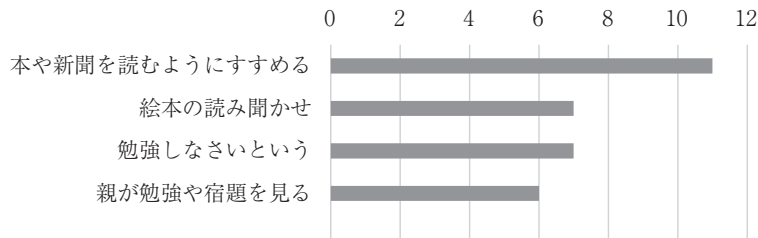


図9 家庭における教育（学業）

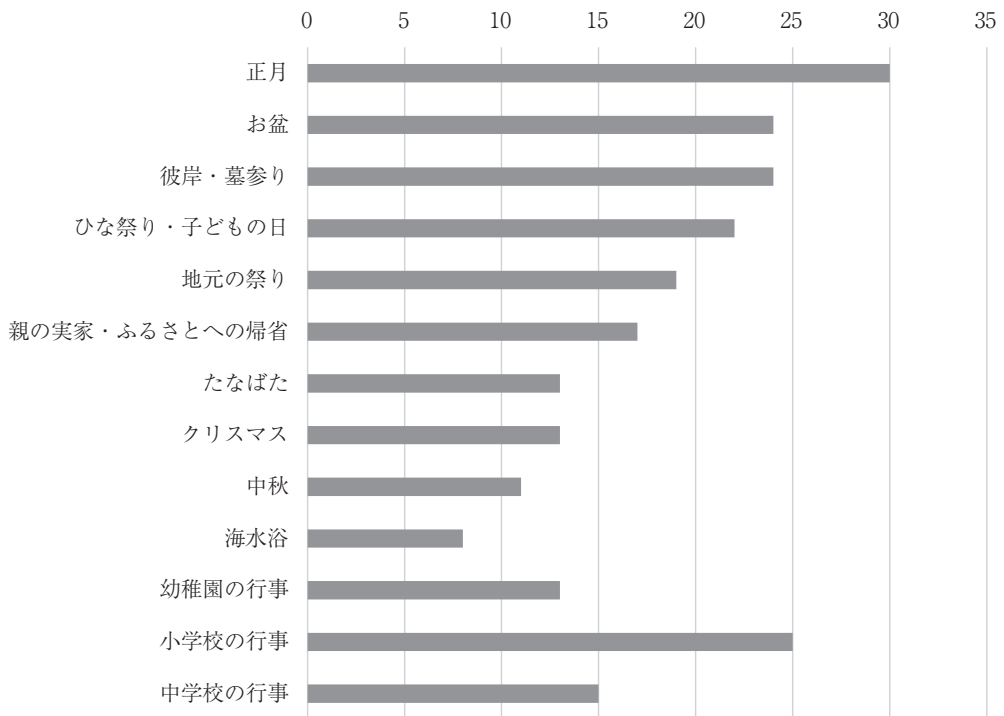


図10 年中行事

とは無いが、本や新聞を読むようには言われた」「絵本の読み聞かせはなかったが、親から昔話の語りを聞いた」という自由記述の回答もあった。都市中間層の家庭においては、文化資本の次世代への継承という現象が見られているとも言える。

ただし、こうしたことが何もなくあったというケースもあった。戦時下で、ネグレクトに近い状態で、放任されていたというケースである（Yさん）。

## ② 年中行事

正月は、全ての家庭で祝っている（回答者は全員、正月を祝っている）。また、家族関連の行事

が多く、お盆、彼岸、墓参りが回答の内、上位となっている。「家族全員で、父の実家に行き、墓参りをした」と語っているインタビューも多かった。これが当時の一般的な家族の中心的な家族行事であったのであろう。

また、こうした家族の行事が重視される一方、「小学校の行事」「中学校の行事」を挙げている者が少なくないことは注目できる。特に「小学校の行事」は多い。親子の家庭生活の中に、学校が入ってきており、学校行事が家族の重要なイベントとして位置づけられるようになってきたと言える。もともと学校行事自体が、村落共同体の祭りといった行事を取り入れながら発展してきた、という事情があるかもしれない。その他、ひなまつり、たなばたといった季節の行事もある。また、家族での海水浴なども、子ども時代の思い出として複数のインタビューから語られている。海水浴は、当時の家族の代表的なレクリエーションであった。

#### (5) 15才頃の親の期待

親の期待としては、家の手伝い、身の回りの整理整頓、友達と仲良く、困っている人は助けてあげる、また、親のいうことを素直に聞き、困難があっても頑張り、女の子らしくふるまうというのも重要である。学業上の期待はそれほど高くは無く、働いて報酬を得ることへの期待も低い。回答者が女性であるため、親の娘に対する期待は、むしろ良妻賢母になることであった、と考えることができる。

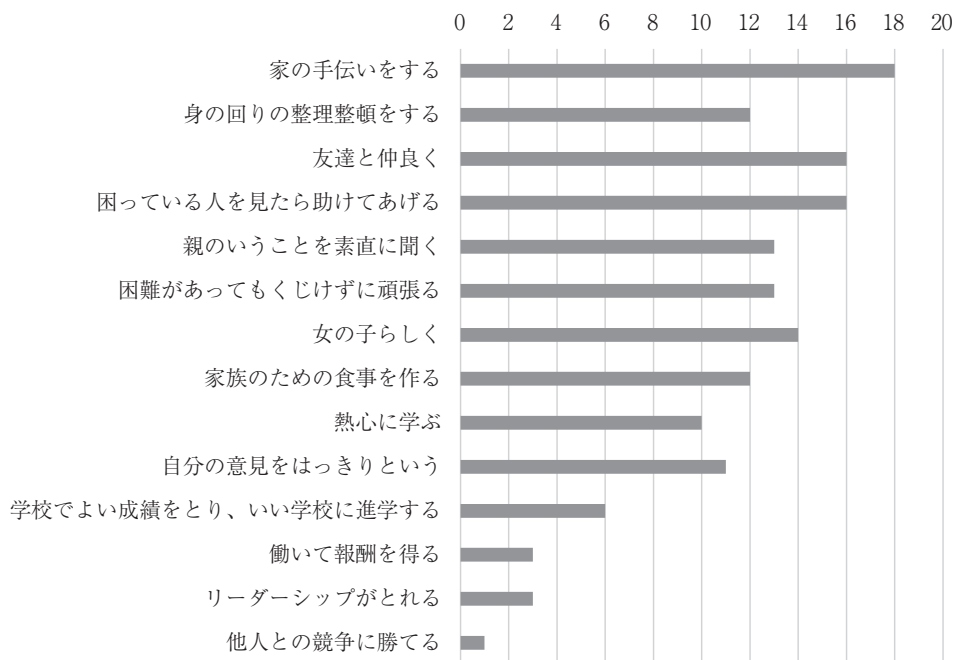


図11 15才頃の親の期待

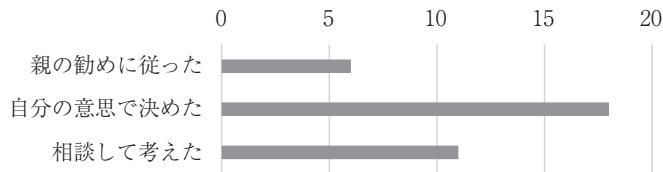


図12 進路選択について

ただ、調査対象者の出生年代から伺える傾向として、1930年代生まれと1940年代生まれを比較すると(1930年:1940年)、「家の手伝い」(11人:7人)「身の回りの整理整頓」(9:3)、「親の言うことを素直に聞く」(10:4)、「熱心に学ぶ」(5:5)、「自分の意見をはっきりという」(4:7)である。1930年代は、身の回りの整理整頓、親の言うことを聞くといった項目の選択が相対的に多いのに対して、1940年代生まれは、熱心に学ぶ、自分の意見をはっきりというを選ぶ回答者が増えている。また、「女の子らしく」(10:4)、「家族のために食事を作る」(10:2)であり、1930年代生まれと1940年代生まれと比べると、1940年代生まれは、女の子らしく、家族のために食事を作るといった項目は、減少傾向にあることがうかがえる。

親の社会的な期待に関しては、幸せな家庭を築く(26人)が多く、高い収入を得る(2)、高い地位につく(1)は少ない。「幸せな家庭を築く」が多く、必ずしも社会的に上昇して高い地位にいたり、高い収入を得ることは、期待されていない。

このように、15才くらいの時の親の娘への期待を見ると、身の回りの整理整頓をして、家の手伝いをして、周囲と仲良くし、女の子らしく振る舞い、親の言うことを素直に聞くことが求められている。一方で、学校で良い成績をとって進学すること、他人との競争に勝つことは、望まれていない。こうして見ると、将来は良妻賢母として夫に尽くし、幸せな家庭を築くことが期待されると言えよう。しかし、戦後、学校で民主主義が教えられるに伴い、家でのしつけの在り方が少しづつ変化を遂げていることも推測される。

「進路選択について」(自由選択)については、「自分の意思で決めた」という回答が多い。出身家庭では、「女の子らしく」が強調され、親は良妻賢母となることを望んでいたが、女性への教育機関の拡大や経済発展の中で、故郷を離れ、結果的には、自分の意思で決めている回答者が多い。

## 2. 考察

ここでは、1930年代から40年代生まれの家庭におけるしつけの特徴的なことを指摘していく。さらに、2020年に実施したA区調査の結果と比較しながら論じていくものとする。

### (1) 規範的文化の継承

#### ①「礼儀を守る」「嘘をつかない」「約束を守る」「ものを大切に」の重視

1930年代から40年代生まれの女性の出身家庭における規範的文化の伝達の中では、基本的な「礼

儀を守ること」とともに、「嘘をつかない」「約束を守る」「ものを大切に」が重視されている。

一方、A区調査(2020)においては、自分の子どもに対する教育に関して重視することとして、「あいさつをする」(この項目について、「そう思う」とした回答者の割合:99.0%,以下同様)、「マナーを守る」(99.0%)、「約束を守る」(97.4%)と並んで、「嘘をつかない」(93.8%)、「ものを大切に」(93.8%)の割合が高い。A区調査(2020)の対象となった児童は、2010年代初頭生まれであるが、児童が受けているしつけと、1930~40年代生まれが家庭で受けたしつけとが、重なっていることに留意すべきであろう。

児童の親世代は、1970年代~80年代生まれであるが、こうして見ると、1930年代~40年代生まれ(祖父母世代)、1970年代~80年代生まれ(親世代)、2010年代生まれ(子世代)とすると、ほぼ3世代にわたって、「礼儀を守る」「嘘をつかない」「約束を守る」「ものを大切に」といった規範的文化が世代間で継承されているとも言える。

たとえば「約束を守る」ことについて、日本人は一般的に取引においても期日厳守であり、信頼が置けるといわれている。家庭教育において世代間で、「約束を守る」ことが幼児の段階から規範意識として伝達されてきたことは、注目に値するのではなかろうか。

また、1930~40年代生まれの出身家庭で重視された「嘘をつかない」は、歴史的に遡ってみれば、江戸時代の貝原益軒や、石田梅岩が中心となって生まれた石門心学の教えに通じるものがある<sup>10</sup>。貝原益軒は、江戸時代のベストセラーであった育児書の『和俗童子訓』において、「幼(いとけな)き時より、心ことばに忠信(まこと)を主として、偽(いつわり)りなからしむべし。もし人をあざむき、偽りをいはば、きびしくいましむべし。……いつはりを云(いう)は、人にあらず、と思ふべし」と述べ、「嘘をつかない」ことの重要性を説いている<sup>11</sup>。

また石田梅岩は、元禄時代のバブル崩壊の中で、商人に対して、基本的な道徳として「正直、儉約、勤勉」というモラルを説き、バブルで自信を喪失した商人たちに心のよりどころを与えた思想家である。石田梅岩の弟子の手島堵庵は、子どもを対象と講話の中で、「偽(うそ)を言うたり為(し)たりはなされるものにて候。これ人間第一のたしなみなり」(口教2『前訓』)として、正直であることの重要性を説いている<sup>12</sup>。相手に対して誠意を持ってあたる「正直」というモラルは、石門心学の中では、特に重視されてきた。石門心学は、江戸時代中期以降、全国的に広がっていくが、こうした江戸以来の道徳が、明治期を経て1930~40年代生まれが家庭で受けたしつけの中でも重視されていたこと、現代の家族にもつながっていることを指摘しておきたい。

礼儀や道徳といった規範的文化は、子どもの社会化の基本であり、人間の集団を形成している基盤である。そのため、「礼儀を守る」「嘘をつかない」「約束を守る」「ものを大切に」といった規範的文化は、江戸時代から現代に至る子育てにまで世代を超えて継承されており、世代間の差異が少ないと言えるのかもしれない。

### ②「他人に親切に」、 「迷惑をかけない」の重視

「他人に親切に」は、1930～40年代にかけて、家庭のしつけの中で重要視されてきた事であった。隣人、周囲の人々との協力関係のおかげで日本人は戦時下、終戦直後といった困難な状況を生き延びてきた。

一方、「他人に親切に」という意識は、A区調査(2020)においても高い比率である(93.8%)。1930年代～2010年代生まれの子どもに対するしつけにおいて、一貫して、周囲の人々に対する親和的態度が重視されているといえる。

また、1930～40年代への調査の中で、「他人に迷惑をかけない」ことが、しつけの中で重視されてきた。インタビューも家の中で、しばしば親が語ってきたこととして挙げていた。日本のしつけは、〇〇してはいけない、という禁止型のしつけであり、その代表的な例として、他人に迷惑をかけないがあると思われる<sup>13</sup>。

「他人に迷惑をかけない」という道徳的規範は、現代においても、他の諸外国と比べて、日本がしつけの中で重視する項目として指摘されている。たとえば、2010年のベネッセによる東京、上海、北京、ソウル、台北における幼児の親に対する生活調査を見てみよう<sup>14</sup>。「将来、どのような人になって欲しいか」という将来に対する期待について、東京の場合、第1位が「自分の家族を大切にする人」、第2位が「友人を大切にする人」、第3位が「他人に迷惑をかけない人」である。他のソウル、北京、上海、台北の場合、第1位は「自分の家族を大切にする人」で、東京と共通しているが、2位、3位は「仕事で能力を発揮する人」「周りから尊敬される人」などとなっている。「他人に迷惑をかけない」という点で日本は突出している。「他人に迷惑をかけない」は、日本人の道徳意識にとって基本となっており、1930～40年代生まれの家庭教育から現代に至るまで継承されてきた規範意識であることが指摘できる

### ③「手伝い」、 「年中行事」にみる変化

「手伝い」は、1930～40年代生まれの家庭でのしつけにおいて、重要な項目である。手伝いに関して、「手伝いをしたので、褒められた」、「手伝いをしなかったので、叱られた」など、しばしば言及されている。子どもにも仕事が割り振られ、こうした役割分担を通じて、人間関係やマナー、労働に関するスキルを学んでいた。手伝いは生活力にも通じていたのである。

しかしながら、A区調査(2020)と比較すると、親が「手伝い」を重んじる割合は、他の「約束を守る」「嘘をつかない」よりも低い(手伝い63.0%に対して、約束を守る97.4%、嘘をつかない93.8%)。現代社会となり子どもの手伝いが必要とされなくなっているためと考えることができる。

また、1930～40年代生まれにおいては、年中行事として、お盆やお彼岸、墓参りなど、「家」や「家族」に関わる年中行事が多い。そして、年中行事の中で、子どもであっても手伝いが期待され、家族や親族の中で、一定の役割を担い、家族の文化を継承していたと言えよう。

しかしながら、A区調査(2020)では、子ども、親などの「誕生日」が重要な家族行事として位

置づけられている（子どもの誕生日の実施率100%、親・祖父母の誕生日の実施率74.9%）。また、A区調査では、年中行事について、保護者自身の子ども時代の家族及び現在の家族における実施率を共に質問しているが、墓参りについては実施率が74.3%から53.4%、お盆については62.3%から37.2%へと急減している。

こうしてみると、1930～40年代生まれから1970年代～80年代生まれ、さらに2010年代生まれにかけて、家族の年中行事の姿が「家」から「個人」へと大きく変化しているのである。また従来は、年中行事が家族の文化を伝承する役割を果たしてきたが、現代社会では、そうした世代間の文化継承において媒介としての作用を果たすものが、姿を消しつつあるのではなからうか。

## (2) 兄弟姉妹関係

### ① 兄弟姉妹間の矛盾

1930年代～40年代に生まれた女性の調査によれば、兄弟姉妹が多いことによる矛盾も多く、兄弟姉妹間の葛藤もあった。当然、兄弟姉妹喧嘩は、多かった。1930～40年代生まれの家庭におけるしつけ調査においては、親から「叱られたのは兄弟姉妹喧嘩」、また「兄弟姉妹仲良くしなさいと言われた」、というように、兄弟姉妹に関する記述が多い。

また「親は長男のことばかりであった」という意見もあり、長男だけが重視されることに対する反発もある。さらに、「自分は上だったので、親から怒られてばかりいた」という記述もある一方、「姉の着物をお下がりとして自分がもらえると期待していたのに、母が布団にしまってがっかりした」という意見もあった（自由記述）。女兒よりは男児が重んじられ、兄弟姉妹が多い場合は、出生順位による対立や葛藤があったのである。

この点、A区調査（2020）においては、しつけに関して特に注意していることの中で、「兄弟と仲良くする」の比率（83.0%）は、「約束を守る」（97.8%）といった他の道徳的規範よりもやや低い。現代社会における兄弟姉妹の少なさ、あるいはいないこと（一人っ子）を反映してと考えることができる。兄弟姉妹間の葛藤の深さは、1930年代～40年代生まれの女性に特徴的であると言えよう。

### ② 兄弟姉妹の協力関係

一方で、兄弟姉妹の多さは、協力関係にもつながっていた。戦争に伴い、1930～40年代生まれは、出身家庭での家族の欠損や、父親の失業といった環境の激変や家族基盤の不安定さに多かれ少なかれ直面していた。また、親が労働で多忙なことに加えて、兄弟姉妹が多いため、「親から何もしてもらえなかった。放置されていた。無関心だった」（Yさん）、あるいは「兄弟姉妹の数が多く、親は食べて寝させるだけで精一杯」（自由記述）だったのである。

こうした困難を、兄弟姉妹が助けあうことで、乗り切っていた。上の子供が、下の子どもの面倒を見る、一緒に遊びに連れていく、協力して農業労働をするというように、兄弟姉妹の関係が濃厚である。兄弟姉妹が相互に支えあい、こうした家庭内における社会関係資本の豊かさが、困難を克

服する力となっていたとも言える。

さらに、このように見てくると、現在、教育界では、非認知能力の育成が注目されているが、1930年代～40年代生まれの場合、兄弟姉妹間の利害対立や葛藤が、忍耐力や自己制御、挑戦する気持ち、さらに兄弟姉妹と協力して目標に取り組むといった、いわゆる社会情動的スキルの獲得に自然に結実していったという側面もあるのではなかろうか。

こうして、「物質的にはきつかった。しかし、家族をお互いに思いやりながら生活した。金がなくとも、精神的に穏やかな日々であった」(自由記述)のである。

### ③ ロールモデルとしての兄姉

1930～40年代生まれの場合、兄や姉がロールモデルとしての役割を果たしていたことも注目できる。

調査対象者の中には、「本や新聞を読むように勧める」の回答者が一定程度いて、これは、大正期以降に都市部の中間層に出現した「教育する家族」(子どもにより良い教育を与えることで、社会的上昇を期待している)であることが伺われる。こうした「教育する家族」であっても、戦後の混乱の中で、上級学校への進学は、本人が望んだところで難しかった。

ただし、上級学校へ進学している兄・姉がいる場合、彼らがロールモデルの役割を果たし、上級学校進学へのアスピレーションが高かった。また兄・姉が学校を卒業後に都会に出ていくことも、進路選択においては刺激になっていた。

価値意識の世代間伝達に関する日米比較研究において、中村は、日本では、世代間の家庭内の伝達(親から子へ)の程度よりも、年齢コーホート(年齢が近い集団)の影響が大きいとしている<sup>15</sup>。そのため、上級学校への進学という価値観が兄、姉という身近な存在からもたらされ、兄・姉の支援で、上級学校に進学し、自分の道を切り開いていったことが、インタビューの語りから明らかにされている。

たとえば、Iさんは、父親が戦後、職を失い事業に失敗し、経済的に困難な状況に置かれていたが、故郷を出て、姉のいる都会に居住することで、上級学校に進学するチャンスをつかんだ。Cさんも、上級学校への進学にあたっては、兄からの支援があった。上の兄・姉が将来の方向性を示すとともに、出身家庭の経済的背景による不利な状況は、本人の教育アスピレーションや努力によって補い、兄弟姉妹がお互いに経済的にも助けあっていたのである。

## (3) 「女の子らしく」とそれに対する反発

### ① 女の子らしく

1930年代～40年代生まれの女性は、しつけにおいて「女の子らしくすること」が期待されていた。また親に対する態度も重要で、「親の言うことを素直に聞く」ことも重視されていた。

一方、A区調査(2020)によれば、「自分の子どもが男の子／女の子らしく振る舞うこと」を重

んじる割合は、17.4%に留まっている（女兒の場合だけでも31.4%）。また、望ましい親子関係で、「はっきりとした上下関係」を望ましい親子関係とする保護者は、8.2%でしかない。友達家族化しているのである。1930～40年代生まれが受けた家庭教育で、現在と違っている点を指摘するならば、「女の子らしく」や「親に対する態度」であると言えよう。

Iさんは、女の子としてのふるまいを祖母から強調されたことに言及しており、「祖母は江戸時代の考え方を受け継いでいた」とする。1930年代生まれにとって、父母世代は明治の生まれ、また祖母世代は江戸時代末期から明治にかけての生まれであり、江戸時代からのしつけの伝統が昭和の家族におけるしつけにつながっていたと言えよう。

また、1930～40年代生まれの女性に対する社会的な期待としては、「幸せな家庭を築く」ことがある。将来は良妻賢母として夫に尽くし、家庭の主婦となり、幸せな家庭を築くことが期待されているのである。

この世代、つまり移行期世代の中で1930年代～40年代生まれの女性は、戦争の影響で、学校でまともに学ぶことができなかつた人も多い。また上級学校に進学したくても親から反対されて、進学できなかった女性は決して少なくない。だからこそ、リベンジとして、結婚後には子どもの教育に熱心にあたり、自分が果たせなかつた夢を子どもに託したのである。こうした教育に対する満たされなかつた思いがバネとなり、子どもの教育に熱心に取り組むことになって、「教育する家族」の主要なアクター、「教育戦略」の担い手となつたのではなからうか。

たとえば祖母から、「女の子らしく」と言われ育つたMさんは、良妻賢母として、2人の子を育て家庭を支えた。二人の子どもは、自分と同じ学校に進学し、愛情を基本とした典型的な「近代家族」を形成したと言える。

また、戦後の社会教育を担ってきたのは専業主婦であつた。今回のインタビューの中には、専業主婦も少なくないが、学校時代にまともに学ぶことができなかつたという教育に対する飢えといつても良い渴望があつた。だからこそ、公民館や学習サークル活動に参加し、失われた学びの機会を取り戻そうとしてきたという。こうした1930～40年代生まれの専業主婦層によって、戦後の社会教育は牽引されてきたということであろう。

## ②「女の子らしく」への反発と進路選択

進路選択について、調査対象者のうち、「自分で選択」したという回答が多いことは注目に値する。「女の子らしく」と言われ続けてきたことへの反抗心もある。また自分の母親は、「夫の言うなりに、子を産む機械であつた」（自由記述）という批判もあり、こうした母親への反発をエネルギーに変えて自分の進路を選択する女性もいる。

インタビューの中には、自分が育つた家をとびだし、自分で活路を見出している女性が少なくない。また、進路選択において、中学を卒業した後に、高校、あるいは大学といった上級学校に進学した女性たちもいる。上級学校への進学は、当時、新制高等学校や高等教育の機会が女性によ



やく開かれるようになっていたことも大きい。

その場合に、進学を支援したのが、学校の教師であった。たとえば、Cさんの場合、進学したいものの、家庭が貧しく親に言い出せずに、自分も諦めていた。しかし難しいとは思いつつも、進学への願いは切実であった。その時、教師が親を説得してくれた。また、学費が支払えなかった時に、助けてくれた教師がいたという。

このように、親に従順にと言われて育ち、良妻賢母が期待されていた。しかし、自分自身の進路選択をし、教師、あるいは兄弟姉妹といった多様なアクターの積極的な相互作用の影響を受けて、教育を継続していった女性たちの存在も見過ごすことができない。

## おわりに

本論文は、近代日本の家庭におけるしつけの変遷を明らかにするための基礎作業として、1930～40年代生まれの女性が家庭で受けた教育に関して検討することを目的としている。調査は、質問票の回収による量的調査及び対面インタビューを中心とした質的調査によって実施された。

また、小学生の保護者を対象とするA区調査(2020)と比較しながら、しつけの世代間の継承について検討した。

第一に、1930年代～40年代生まれの女性の出身家庭では、規範的文化の中で、「約束を守る」「うそをつかない」「他人に迷惑をかけない」「他の人に親切に」が重視されていた。A区調査(2020)と比較すれば、こうした規範的文化は、現代の家族におけるしつけにおいても継承されている。学校教育の大衆化に伴い、親の子どもに対する教育期待は急激に変化してきたものの、それに比べて規範的文化や基盤となる価値観は、変化が少ないと言える。

第二に、1930～40年代生まれの家庭における教育において特徴的なこととして、兄弟姉妹の数の多さからくる葛藤がある。その一方で、戦争に伴う家族構造の不安定、経済的基盤の困難に対して、兄弟姉妹が協力しあい相互に補った。こうして葛藤や対立を克服し、協力し合いながら困難に立ち向かうことで、自然に忍耐力、自己制御、挑戦する気持ちといった社会情動的スキルを獲得していった。

そして兄・姉はロールモデルとしても大きな役割を果たした。伝統的な家族に対して、学校教育という新しい価値観を持ち込んだのは上の兄姉であり、妹の上級学校への進学も応援した。

第三に、15歳時の親の娘に対する期待を検討するならば、女の子らしくといわれ良妻賢母になることが期待された。彼女たちの中には、戦時下・戦後の混乱や、あるいは親からの反対で学校でまともに学ぶことができなかった者も少なくないが、こうした移行期世代の女性たちは、自分の果たせぬ夢を次世代に託すことで、「教育する家族」の主要なアクターとしての役割を担っていく。

他方、調査対象者の中には、母親への反発から、自分で進路を決定し、教師の支援を受けながら大学に進学し、職業を持つ者も少なくなかったことを付言しておきたい。

今後の課題としては、本調査においては、インタビュー調査から伺えるように、大都市近郊、中

間層の出身家庭が多い。その意味でデータの偏りがあることは否めない。今後、地域や階層にも留意をしつつデータの収集・分析を行っていききたい。

さらに、今後、1950年代生まれ以降の分析をし、3世代にわたる規範的意識の継承について検証していくものとする。

## 謝辞

本論文は、科研・基盤(C)「東アジア地域における家庭教育と規範的文化の継承に関する国際比較研究」2019-2021年度(研究代表者:小林(新保)敦子)の一貫として実施された調査の研究成果である。質問票調査にあたっては、宇佐美郁子さん、飯島千鶴子さん他に、多大なご支援を頂いた。また、A区調査(2020)においては、A区教育委員会、S小学校の協力を受けた。関係者の皆様に心から謝意を表明したい。

## [注]

- 1 科研・基盤(C)「東アジア地域における家庭教育と規範的文化の継承に関する国際比較研究」2019-2021年度(研究代表者:小林(新保)敦子)参照。同研究は、東アジア地域(日中韓台)における1930年代から現在に至るまでの、祖父母世代—親世代—子世代の3世代における家庭における規範文化の継承/断絶を検証することを課題としている。
- 2 伊藤達也「同時代を形成する人々—人口高齢化と社会経済と教育環境の変化」(世代と教育環境〈特集〉)『教育と情報』, 380号, 第一法規, 1989年, 8-14頁。
- 3 落合恵美子『21世紀家族—家族の戦後体制の見かた・超えかた』(第4版), 有斐閣, 2021年, 82-83頁。
- 4 中澤智恵, 余田翔平「〈家族と教育〉に関する研究動向」『教育社会学研究』, 第95集, 2014年, 171-205頁。
- 5 広田照幸『日本の家庭教育は衰退したか』, 講談社, 1999年。
- 6 有地亨『日本人のしつけ—家庭教育と学校教育の変遷と交錯』, 法律文化社, 2000年。
- 7 中村絵里「親による教育関与(parental involvement)に関する研究の動向と展望」『東京大学大学院教育学研究科紀要』, 第58巻, 2018年, 485-493頁。
- 8 天童睦子・多賀太「「家族と教育」の研究動向と課題—家庭教育・戦略・ペアレントクラシー」『家族社会学研究』, 第28巻第2号, 2016年10月, 224-233頁。
- 9 Tendo, M., Shimbo, A., Parenting and family education in Japan: Towards a comparative study of cultural transmission in East Asia, The 27th Taiwan Forum on Sociology of Education Authorized as a 2021 Midterm Conference of RC-04, ISA Conference, 2 October 2021. 調査項目は、主に以下の先行研究に依拠して作成されている。1) 育児戦略の社会学的研究の枠組み(天童睦子編『育児戦略の社会学—育児雑誌の変容と再生産』世界思想社, 2004年), 2) 小学生を持つ親の教育意識調査(高橋均・北海道教育大学旭川校教育学社会学研究室編・発行『政令指定都市在住小学生保護者の子育て・教育意識に関する調査 集計報告書』, 2018年)。
- 10 石川謙『石門心学史の研究』, 岩波書店, 1938年。前掲有地, 97頁, 103頁, 181頁。
- 11 貝原益軒著, 石川謙校訂『養生訓・和俗童子訓』, 岩波書店, 1961年, 213頁。
- 12 山住正巳・中江和恵編注『子育ての書』2, 平凡社, 1976年, 239頁。
- 13 前掲有地, 111頁。
- 14 「幼児の生活アンケート・東アジア5都市調査」, 2010年, ベネッセ次世代育成研究所。https://berd.benesse.jp/jisedai/research/detail1.php?id=3202(最終閲覧日2022年1月11日)
- 15 中村雅子「価値意識の世代間伝達に関する日米比較」『家族社会学研究』, 第9巻(特集 文化と家族), 1997年, 39-56頁。